

## 大会準備委員会企画シンポジウムⅣ

### 共に響く歌・音・動き —乳幼児の表現発達の道筋から—

企画・司会 名須川知子（兵庫教育大学）  
シンポジスト 細田淳子（東京家政大学）  
小山朝子（東京都北区立滝野川保育園）  
坪能由紀子（日本女子大学）  
指定討論者 澤口俊之（北海道大学）  
小林美実（宝仙学園短期大学名誉教授）

#### 【企画趣旨】

「表現する」ことは、乳幼児にとってまさに「生きている」ことである。そして、その生の営みは日々の生活の中で育まれ、仲間と保育者が共に響きあいながら織りなしていつている。特に「表現の道筋」に沿った乳児期から幼児期、そして小学校へと連携としての内容的なつながりも大きな課題である。

このような表現教育のあり方や方法を探るために、これまでの研究の蓄積や実践の現状について様々な立場から提言する。そこで、共に響く表現としての課題について脳科学の最新の研究成果からも示唆を得たいと考える。そして幼児期の表現のあり方と表現を促すふさわしい環境について、このシンポジウムをとおして示唆を得ることができたらと考えている。

#### 提案1：細田淳子

##### 『響きあうことが発達をうながす』

本シンポジウムで「共生」ということを考えた時、そこでいう「共に生きていること」を実感できるのは、共に響きあうことができた時だろう。響きあう形はさまざまであっても、子どもと大人あるいは子どもどうしで感覚や感性が響きあった時に、共に生きていることを感じられるのだと思う。

言い換えると、楽しい歌をいつしよに聞いて「楽しいね」と目と目を合わせて笑いあうことができた時や、赤い夕日を眺めて「きれだなあ」といつしよに思えた時などの気持ちが、ここでいう共に響きあうことだと私は考える。そしてこのような響きあう経験が積み重ねられることによって、子どもの発達は促されていく。

##### 『歌、音、動きはひとつの表現』

子どもにとって、本テーマの「歌、音、動き」は渾然一体となっていて、どこからが歌でどこからが動きなどという境目はない。うたいながら自然に体が動くこともあれば、ある音のイメージから幼児の自発的な歌が生まれたり、動いているうちにもっと楽しくなって手拍子や足踏みの音が加わることもあるだろう。だが、そのことを理解していない大人が多いと思う。

##### 『聞く耳を育てることからの出発』

子どもはそれぞれ好きな音を発見し、こだわりをもっている。子どもの音に関する感覚を育てるために、よく聞いて感じて味わうというところから出発したいと思う。騒音の多い現代社会においては、じっくり音を聞いて味わうことはむずかしくなっている。だからこそ近くにいる親や保育者がまず音に興味を持ち感動を共有することが大切になる。しっかり聞いて感じて、子ども自身の心を通した後に出てきた表現だけがそれを受け止める側の心をふるわせることになるのだと思う。

##### 『子どもの表現を受け止めたい』

今日表現と言うことがばく広く使われるようになってきている。しかしこのことばは、乳幼児がどのように表現しているかを見ていくのではなく、どのように表現させるかという意味で使われているような気がする。つまり発表会などで、歌をどのようにうたわせるか、楽器の演奏技術をどのように教え、表現させるか、といった使い方である。そうではなく幼児期には子ども自身が、音楽の心地よさ、音楽の根源的な楽しさを、自ら感じながら外へ表現していく体験をさせたい。

そしてわれわれ大人は、子どもが安心して表現できる環境を保障した上で、かすかな響きも見逃さないようしっかりと子どもの表現を受け止め、共に響きあっていきたいものである。

## 提案2：小山朝子

「乳幼児における子どもの表現発達から見た人的環境の重要性を踏まえて」

最近の社会状況下において、乳幼児期の子どもの表現の育ちを考えると、まず子どもが日々の生活の中で安心して思うままに自己表現できる環境の重要性を感じている。その環境は主に物的環境と人的環境に分けられるが、中でも私は、人的環境がより表現の育ちには重要であると考えている。なぜなら、子どもの何気ない毎日の表現を受け止めたり、それに呼応したり、響きあいを共有して、心地よさやさらなる表現へつなげていくのは身近な大人や友達だからである。

そこで私は、まず表現の育ちの基盤作りの時期といえる乳児期の子どもの人的環境について考えたい。乳幼児の子どもは、生命維持のためにはもちろんのこと、自己充実欲求を満たすためにも大人のかかわりは生活上必要不可欠な関係であることは明らかである。その大人が、それらの子どものあらゆる表現一顔の表情や出している声、動きなど一すべてを総合的に捉えていき、子どもの内面を読みとり対応していくという積み重ねは、子どもに「自分を外界に出して良い」ということを肌（身体全体）でわかり、後には表現と非常に関係深いであろう「自己肯定感」を養う。私は、今現在、これこそが子どもが日々の生活の中で安心して好きなように表現するための基盤であろうと感じている。

私が、公立保育園保育士になって9年目を迎えているが、保育現場は新人保育士の頃とはまったくと言っていいほど激変している。現在の保育現場は子どもや保護者の複雑な問題に取り組むだけでなく、様々な事業をどこの保育園も一手に引き受けなければならず（所属園では延長保育、今年度より産休明け保育・1歳児定員拡大、子育て支援、その他）、目の前の子どものためによりよい保育の場を確保するため、模索を続けながらとにかく頑張っている、というのが本音である。そして、そのような保育現場で、あくまでも子どもの音楽的成長のみではなく、人間的成長を願い、毎日の保育をしている一保育園保育士として、以上のようなことを踏まえて、乳幼児期における子どもの共に響く歌・音・動きの表現についての話題提供をさせていただくこととする。

## 提案3：坪能由紀子

「子どもの音楽活動における音楽づくりの意味」

子どもは声や身のまわりのものを使ってさまざまな音を生み出している。そんな子どもの自発的な音楽行動を発展させ、小学校や中学校の音楽科に位置づけたのが創造的音楽学習である。こうした試みは1960年代から70年代にかけて世界各地で行われていて、日本の学習指導要領で1989年から「音楽をつくって表現できるようにする」（小学校）として、小学校から高校に到るまで創造的音楽学習にあたる活動が位置づけられているのははじめ、イギリスの「ナショナル・カリキュラム」や「アメリカのナショナル・スタンダード」にも取り入れられている。これが一般化した現在では日本では単に「音楽づくり」と呼ばれることも多い。また学校教育だけでなく専門教育や社会教育の中にも次第に広まっている。その大きな特長は、音素材として身のまわりのすべての音を用いること、演奏技術や読譜力がほとんどなくても可能であること、特定の様式に縛られることのない自由な創作であること、即興性を重視することなどであり、だからこそすべての人を対象とした普遍的な音楽活動となりうるといえるだろう。子どもが日常つくり出している音は、そのままにしておけば消えてしまう。しかし他者がそれを意識化し、受け止め、あるいは発展させながら共有することによって、子どもは音による創造の面白さに気づき、音を使って自分の表現の世界を広げ、音を通じてコミュニケーションの世界を広げていくことができる。「音楽づくり」における指導者の役割はここにあるのではないかと考える。それは技術や歌を教える教師のあり方とは対極にあるといえるだろう。

筆者は1970年代からこうした子どもの音楽づくりに関わり、小・中学校の音楽の教師たちと共同して新しい授業の創造に取り組み、また自らもさまざまな人びとを対象に「音楽づくり」のワークショップを展開してきた。ここでは小学校低学年と中学年の子どものつくった音楽の比較を通して子どもの音楽的な発達の一側面を見ることによって、筆者が今まで関わることの少なかった幼児期の子どもたちにとって「音楽づくり」がどのような意味を持ちうるか、またその発達段階を考慮してどのような導入の方法が可能かを展望するための手がかりとしたいと考えている。